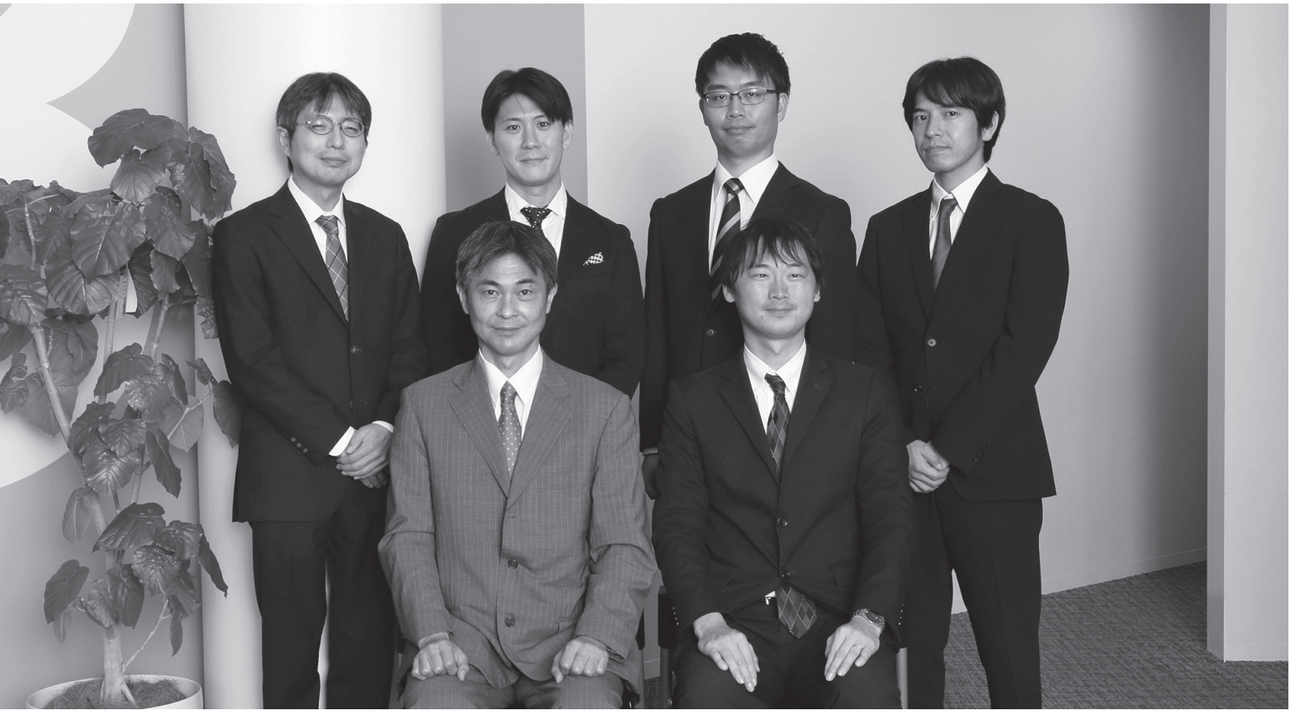

特別座談会

有名中学の先生に聞く 社会科と時事問題に強くなるには

世の中で起きているさまざまな出来事を自分の生活と関連づけて考えれば、理解しやすくなる

この夏、国内では記録的な猛暑となりました。食品や電気料金の値上げをはじめとする物価の上昇は、国民の生活を圧迫しています。一方、海外へ目を向けると、ロシアによるウクライナ侵攻は今なお続き、イスラエルとパレスチナの紛争は多くの犠牲者を出しています。2023年も国内外においてさまざまなニュースがありましたが、こうした出来事は中学入試の問題の題材にもなります。これら世の中の動きや出来事に関心を持つことがなぜ重要なのか、有名中学の先生方にお話をお聞きしました。

●後列左から
司会／サピックス小学部 **加藤 宏章**（社会科教科責任者）
早稲田実業学校中等部 **山岸 英生**先生
海城中学校 **名倉 一希**先生
司会／サピックス小学部 **住田 俊祐**（社会科副教科責任者）

●前列左から
桐朋中学校 **家所 正樹**先生
洗足学園中学校 **飯島 善章**先生

社会科で学習した内容と、実際に起きている出来事にはどこかに共通点があります。そこが理解の糸口になるはず

海城中学校 **名倉 一希**先生

なぜそうした問題が起こっているのか 理解はできなくても調べる姿勢が大事

加藤 まずは2023年に先生方が特に関心を持たれた出来事やニュースからお聞かせください。

名倉 現在進行形のものも含めてさまざまな報道がありましたが、国際的な出来事としてインドを巡る動きも注視すべきニュースの一つだったように思います。報道によると、インドは2023年半ばに人口が約14億3000万人になり、中国を上回って世界最多となりました。単に1位になったということではなく、それだけの国民を養う食料やインフラを供給できていることを含め、経済成長の可能性という面からあらためて潜在的な力を感じました。2023年はニューデリーで主要20か国・地域首脳会議（G20サミット）も開かれましたし、ロシアや中国との関係でもインドは独自の外交を展開しています。欧米先進国より相対的に南に位置する新興国や途上国を表すグローバルサウスというくくりでは、東南アジアのインドネシアも人口の多い資源豊富な国です。これら成長力のある国が、今後、世界にどのような影響を与えるのかに注目しています。

山岸 社会科の各担当の先生に聞いたところ、まず挙がったのは猛暑でした。国連事務総長が“地球沸騰化”ということばを使って表現した気候変動がなぜ起きているのか。また、ただ暑かったということだけでなく、たとえば猛暑が野菜の価格高騰など身近な生活にさまざまな影響を与えることが実感できたはずです。時事問題が自分とどうつながっているのかを考えるきっかけとしやすいテーマだったのではないでしょうか。そのほか、学校行事で観光地を訪れることもあるなかで、オーバーツーリズムの問題も、生徒にとってある意味、身近なテーマといえるかもしれません。観光客は経済面でメリットをもたらす半面、生活している人にとってはデメリットもあります。いろいろな視点から物事を考えられるテーマの一つだったように思います。

飯島 最近の出来事としては、やはりイスラエルとパレスチナを巡る問題は、社会科が取り上げるテーマかと思います。なぜこういう問題が起こっているのか、小学生が全容を理解するのは難しいと思います。けれども、「どうしてこうなっているのだろう」と自分で調べようとする姿勢はとても大事です。背景が複雑で中学生でも理解しきれないところもあるのですが、詳しくはわからないけれど場所だけでも調べてみようとなれば、ほかにも紛争が起こっている地域はあるのかなど、関心が広がっていく可能性もあります。まずは興味を持ってもらうところからだと思います。

家所 同感ですね。ニュースを見て、どうしてそういうことが起きるのかを考えることは大切です。わたしは今、高校生に戦後の日本経済史を教えているのですが、岸田政権の経済政策が最終的にどういうところに落ち着くのかに関心があります。「失われた30年」といわれるように、低迷が続く日本経済をどう再生させていくのか、その糸口をどこに見いだしていくのか。確かに小・中学生には難しいテーマですが、経済的にあまりうまくいっていない閉塞感は、何となく理解しているのではないでしょうか。これまでは海外に物を売って豊かだったのが、その条件が崩れてしまっています。難しいことはわからなくて当然として、彼らなりに、「なぜだろう、どうしてだろう」と考えてみることはとても大事だと思います。

小学校の教科書で学んだことと、社会で起きていることはつながっている

加藤 あらためて、世の中の出来事に関心を持つことはなぜ大事なのでしょうか。

山岸 先ほど猛暑やオーバーツーリズムの話をしましたが、たとえば暑いから外に出るのは嫌だなとか、観光客で電車が混んでいるなとか、時事問題は時に自分の生活と密接にかかわっているはずです。また、時事問題に関心を持つことで、教科で学んだ内容と、自分が生きている社会とがつながり、より理解を深めることができます。パレスチナ問題でも歴史的な背景を学べば、なぜすぐに解決できないのか、事態の複雑さが理解できるはずです。たとえ遠く離れた地での出来事であっても、必ず自分の生活とつながっているので、そうした点も意識しながらニュースに接してもらえればよいと思います。

なぜだろうと疑問に思うようなことは身の回りにもたくさんあるはず。『どうしてなのか』と考える習慣をつけよう

洗足学園中学校　**飯島 善章**先生

飯島　ニュースで流れてくるもの以外にも、なぜだろうと疑問に思うテーマは身の回りにもたくさんあるはずです。たとえば電車に乗ろうと駅に行けば、どうしてこの駅はバリアフリー化が進んでいないのだろうとか、なぜ高架化されているのかとか。「なぜ、どうして」と疑問を持って考える習慣がつけば、その時々で考えたことが、別のテーマの考察にも生きてきます。時事問題のニュースを検索して概要を丸暗記するのではなく、世の中の仕組みを考えるきっかけとして、時事問題に接してもらえればいいのではと思います。

家所　社会科は人の営みを学ぶ教科です。営みには時間軸での歴史という観点もありますし、舞台としての地理もあります。それらがさまざま紆余曲折を経て今の社会が成り立っているわけで、すべてはつながっています。少し大げさな言い方になりますが、そうした歴史の時間軸のなかのひとコマを、わたしたち大人も子どもたちも共有しています。社会のあらゆることは自分にもつながっていると理解できれば、時事問題への興味・関心も芽生えてくるのではと思います。時事問題に接するときに重要なのは、触れた情報に意味を感じ取れるかどうか。大事なのは共感力です。つまり、それぞれの立場になって考えてみることなのです。パレスチナ問題は日本から離れた場所での出来事ですが、そこでも確かに人の営みがあるわけで、歴史的な背景などの知識を得たうえでその地で暮らす人々に思いをはせることで、理解が深まるはずです。

名倉　社会の動きに関心を持つことは、社会科学習そのものだという気がします。試験問題では一問一答形式で人物名や語句を問うことがありますが、それは社会の動きを考察する際に必要な知識だからです。ベースとして知識は必須ですが、知識が豊富なだけでは暗記が得意なのであって、社会科が得意というわけではありません。肝心なのは、そうした知識をもとに社会の動きに疑問や違和感を抱いて、背景を探るなどして、仕組みを理解することです。受験生を含めて、みんなが社会の中で生きています。社会の動きに関心を持つことは、時事問題対策や社会科の好き嫌いとは関係なく、自立して生きていくために必要なことだからだと思います。

加藤　時事問題の学習姿勢として、どのようなことに気をつけて取り組めばいいのでしょうか。

名倉　社会科で学習してきた内容と、世の中で起きていることとのつながり、共通点を考えてもらえればと思います。その時々の出来事と、社会科で学んでいる世の中の仕組みには、接点があるはずです。小学校の教科書に書かれている社会の仕組みや事例を頭に入れて、この前報道されたこの出来事は、教科書のここに書かれていることと同じじゃないかとか、そうした共通点を説明できるようになってほしいと思っています。

家所　テレビで構わないのでニュースはぜひ見てほしいですね。保護者の方には、できればその場で子どもたちと会話をする習慣をつけていただければと思います。そうした経験の積み重ねによって、子どもたちは複眼的な視点を持つことができるようになり、そうした視座を獲得することはその先、必ず役立つはずです。

飯島　なぜだろうと思うようなことは身の回りにあふれていると言いましたが、そこから先にどう進めるかという点では、たとえば誰かと話すなかで理解が深まっていくこともあります。家庭、あるいは友人同士で、どうしてなのかと話題にすることで、切り口のヒントが見つかり、調べ学習のモチベーションにつながることもあるのではないでしょうか。現在の時事問題は小学生にとって遠い世界の話かもしれませんが、彼らはこれからそうした時代を生き、活躍していくことになります。子どもたちがいろいろなことに興味を持てるよう、ぜひ保護者の方もサポートしてもらえればと思います。

山岸　本校では、社会科に限らず総合的な学習の時間でのフィールドワークを大事にしています。小学生にも、ぜひ実際にさまざまな場所に行って、自分の目で見て実感してほしいと思います。史跡、国会や裁判所、博物館などもいいですし、ぜひスーパーにも行ってほしい。この野菜の値段はいくらか、コメの値段はどうか、上がったのか下がったのか。その要因を考えると、猛暑、あるいは中東の問題につながるかもしれません。

加藤　ニュースや出来事を、自分の生活と関連づけて考えてみると、理解が深まるということですね。

加藤 宏章
サピックス小学部
(社会科教科責任者)

住田 俊祐
サピックス小学部
(社会科副教科責任者)

遠く離れた場所での出来事でも、必ず自分とつながっています。他者の立場になって考えることで、広い視野を身につけよう

桐朋中学校　**家所 正樹**先生

社会で起きている問題を理解するために教科の枠を超えた総合的な学習を重視

住田　社会科の授業ではどのような取り組みをされているのか、特徴的なものがあればご紹介ください。

山岸　先述のようにフィールドワークを重視しています。本校の地理の授業では、フィールドワークで得た成果を自分でレイアウトして地図にする課題に取り組んでおり、地図の作品展など外部のコンテストに応募することもあります。他の科目でも、自分でリサーチしたことをもとに作品を作り上げるパフォーマンス課題に取り組んでもらうことがあります。学んだこと、調べたことを、そこで終わりにするのではなく、どうその後につなげていくかを意識しています。

名倉　中学では、地理・歴史・公民の学習に加え、各学年で本校独自の社会科総合科目を設定しています。社会問題に関する任意のテーマを、生徒それぞれが考えて設定して個人研究を進め、たとえば中3であれば400字詰め原稿用紙30枚以上の卒論を執筆します。外部の団体や企業にも自分でアポを取って取材を進めます。本校でもフィールドワークで得たものを調べ学習だけで終わらせないよう、社会で当たり前とされていることに疑問を持って問題提起をするところに主眼を置いています。そのためにも、授業でも科目の範囲にとらわれない、総合学習的な視点を意識するようにしています。

飯島　総合学習的な視点を重視しているのは本校も同じで、中1・2は個別科目ではなく、「総合社会（世界）」「総合社会（日本）」という名称で、週2コマずつ授業を展開しています。世界や日本のことを題材に、地理・歴史・公民を融合させながら学んでいきます。たとえば、株式会社をテーマに、自分たちで作るとしたらどんな会社にするかをグループに分かれて議論して、発表します。またグループ学習は共同作業なので、他者を尊重しながら力を合わせて作り上げていく体験そのものが、これから生きていくうえでの学びになるという思いもあります。

家所　新学習指導要領で探究が入り、大学入試でも、教科横断的に思考力や表現力などを総合的に評価する問題が出題されています。「自分で課題を見つけて、情報を集めたり分析したりしながら解決していく探究力」の醸成につながる取り組みとして、本校では、夏休みに課される自由研究が挙げられます。研究に際しては、信頼できる情報であるか否かを自身で峻別しつつ、明確な問題意識を持ち、かつ、自分の足を使って情報収集にあたるよう指導しています。教員を唸らせる研究が毎年提出され、優秀な研究には賞を授与します。

読書など活字に触れる機会を増やし、問題文や資料を読む力を身につけてほしい

加藤　生徒をご覧になっていて、こういう力をつけてほしい、あるいはこうした力が不足していると感じることはありますか。

飯島　読むことが苦手な生徒が少し増えている気がします。インターネットでのブログや記事は内容が短く要約され読みやすいものが多く、長い文章を読む機会が減っているのではないでしょうか。テキストリーディング力はとても大事です。授業で話を聞くだけではなく、資料を読んでみずから先に進んでいく力は高校や大学では必須です。本校では月に1冊は読書をしようということで、読書リストを毎月提出させています。

名倉　国語科で定期考査に課題図書を出していますし、社会科でもレポートを書く際に何冊かの文献を引用して考察するよう指導しています。レポート作成前になると、書店の新書の棚の前でテーマを考えている生徒が多いようです。国語科だけではなく社会科でも、本を読んでもらえるような工夫が必要ですね。

入試では、「基礎的な知識」「資料を読み取って自分の知識と結びつける力」「それをわかりやすく表現する力」が問われます

早稲田実業学校中等部　**山岸 英生**先生

住田　読書も共感力を身につけるツールの一つかもしれません。

家所　そのとおりですね。人と人とのコミュニケーションに限らず、書籍を通じて新たなものに触れることで共感力が養われることはあると思います。良質なコンテンツを、きちんと読む経験は必要です。本校も同じで、できる限り良質な内容の活字に触れてもらうよう、中1時から推薦図書リストを提示し、その後も図書館と連携して各教科の教員が推薦図書を紹介しています。

山岸　共感という視点では、たとえばパレスチナ問題でも、ガザの人たちがかわいそうと思うシンパシー（同情）で終わらず、エンパシー（共感）を備えて、これからどうすべきかを考えなければなりません。そのためには、読書などを通じて歴史的な背景や地政学的な要因を理解する必要があります。ただ、どうやって読書に導いていくかはなかなか難しいですね。先ほどのパフォーマンス課題での作品も、がんばってくれて出来栄えは悪くはないのですが、ネットの情報だけを参照しているものもあります。日本史探究であれば参考書籍を指定するなどして読書を促してはいますが、どうやって読むように仕向けていくか、日々頭を悩ませています。

家所　今は簡単に情報にアクセスできます。しかしながら、検索して出てきた画面をただ眺める作業と、読書を通じて文字を追って、書かれている内容を確認する作業とは次元が違います。社会科に限らず、物理や化学、数学でも、最終的には理解している内容を他者に伝えるために言語化しなければなりません。ロジックをしっかり自分のものにして、文字を落とし込んで他者に伝える力をつけるには、お手軽な情報アクセスだけでは無理なように思います。どのようなジャンルの本でもいいので1冊しっかり読み込んで、内容をすべてものにしたという経験がないと、深い考察をしていく道筋が理解できないのではないでしょうか。そうした意味でも、活字離れは心配ですね。

加藤　手軽に得た情報だけでは、深い理解にはなかなかつながらないということですね。

持っている知識を使いながら、自分の考えをわかりやすく表現してほしい

住田　どのような思いや考えのもとで入試問題を作られているのか、差し支えない範囲で教えてください。

家所　基本的にはそれほど難しいことは聞いておらず、出題の仕方も、問題文をきちんと読んでいけば設問に答えられるよう工夫しているつもりです。設問の順番にも意味があるので、作問者側が答えさせようとしているのは何なのか、そこを意識してもらえると正答に近づくように思います。入試問題に込めた思いとしては、やはり一定の知識は持っている前提で、文章を的確に読んだうえで表現してほしいということ。これはどの学校でも同じだと思います。そこに、本校であれば「自主・敬愛・勤労」という教育目標があり、個人的に訳せば「自分で考えて判断できるようになろう、置かれている状況や立場の異なる人の気持ちがわかるようになろう、人と人をつないで一緒に仕事ができる人間になろう」となります。世界でも国内でも、自分とは違う状況下にあるいろいろな人たちがいるということに気づいてもらえるような問題が出せればとは思っています。

山岸　同様に、まず小学校の教科書レベルの知識は身についていることが前提になります。そうした基本的な知識がないと、先述したような知識を応用して作品を作る授業に対応できません。以前は難度の高い問題も出題していたようですが、近年はそうしたものは少なくなり、与えられた地図やグラフのような資料、あるいはリード文を読み取って、自分の知っている知識と結びつけて答えさせる出題が増えています。アドバイスになるかはわかりませんが、まずは問題文をしっかり読んでください。問題文の中に解答のヒントが隠されている場合もあります。さらに、自分の考えを、論理的に文章としてわかりやすく書くこと。繰り返すと、基礎的な知識、与えられた資料を読み取って自分の知識と結びつける力、それを論理的に文章としてわかりやすく表現する力を求めているというメッセージが入った問題になっていると思います。

名倉　本校では例年、B4用紙1枚程度の本文で展開するテーマから、派生した問いを並べる出題形式になっています。この問いは科目融合型のものも多く、また合計350字程度で数題の論述も出題しています。自由作文ではないので、資料を参考にしながら考察を進めてください。入試問題にはそれぞれの学校の思いが込められているので、ぜひ入試対策をして臨んでほしいと思っています。学校側は、こんな生徒に来てほしい、入学後の授業に対応するにはこんな力を身につけてほしいと思って作問しているはずなので、自分に合った学校かを判断するという意味からも過去問対策はしていただければと思います。論述であれば、問題文の内容と、時代を問わず社会での出来事とをリンクさせるなど、持っている知識や考察した経験などを思い浮かべながら、表現してもらうといいのではないかと思います。

飯島　本校では語句問題・記号選択問題・資料問題・短めの論述問題などをまんべんなく出題しており、入試問題としてはかなりシンプルだと思います。試験時間は理科と合わせて60分で、地理25点、歴史25点、公民25点の75点満点です。地理・歴史・公民がフラットな学校は少ないかもしれません。これは、総合社会のような科目横断的な授業を進めていることにも関係しています。偏りなく興味を持ってほしい、あるいは各科目にまんべんなく取り組んで、総合型の授業に対応できる土壌を中学受験の段階でつけてほしいという思いで、入試問題も作っています。

加藤　最後に、今そうした学校の思いに応えようと入試に向けてがんばっている子どもたちと保護者の方々に、メッセージをお願いします。

山岸　本校はほぼ100％の生徒が早稲田大学への進学が可能です。高校受験や大学受験をしたくないから付属校に行きたいという方もいるかと思いますが、何かをしたくないからではなく、早実に行って部活に打ち込みたいとか、この教科の勉強に集中したいとか、やりたいことを抱えて入学してきてほしいという思いがあります。これをしたい、こういう未来をつくっていきたいから大学のある早実に行きたいという思いで、チャレンジしてもらえればうれしく思います。入学後にこういうことをやりたいというイメージがあれば、受験勉強の励みにもなるかと思います。

名倉　12月に入って、受験生は最後の小学校生活を送っていることと思います。受験を意識するとつい周りが見えなくなって焦るかもしれませんが、できれば二度とない小学6年生の残り3か月を大事に過ごして、保護者の方も、お子さまとのかけがえのない日々を送っていることを意識しながらお過ごしいただければと思います。春に皆さんとお会いできるのを楽しみにしています。

飯島　おそらく志望校の過去問に取り組んでいるお子さんも多い時期かと思います。過去問も、淡々とこなすのではなく、そこに込められた学校からのメッセージを意識してもらえると、ポイントがつかめるはずです。今回の座談会でも、さまざまな出来事は自分とつながっていると考える、他者の立場になって考える共感力を持つという話がありました。作問者側の視点に立って考えることは、来春の入試だけではなく、中学や高校に入ってからの学びにもきっと役立つはずです。ぜひ学校とのそうした会話も楽しみながら、取り組んでもらえればと思います。

家所　先生方からもアドバイスがあったように、入試問題に対しては、しっかり問題文を読むこと、記述は伝えたいことを論理的に表現すること、そしてできれば嫌々ではなく前向きな姿勢で学習に取り組むことが大事ではないかと思います。これまで一生懸命に勉強してきた自分をほめてあげて、あらためて保護者の方をはじめ、いろいろな人たちの後押しがあってここまできたこと、大勢の人たちが応援してくれていることを思い出しながら、最後まであきらめずにがんばってください。

加藤　**住田**　先生方のことばは、きっと受験生と保護者の方の心に響くと思います。本日はお忙しいなか、ありがとうございました。

2024年中学入試用
『サピックス重大ニュース』アンケート結果
（主に2023年のニュースを収録）

私立中学校の先生に聞いた小学生に知っておいてほしいニュース・トップ20	
第1位	G7（ジーセブン）広島サミットが開催
第2位	インドの人口が世界一に
第3位	ジェンダー平等、LGBT理解増進法の成立
第4位	福島第一原発の処理水を海洋放出
第5位	物価の上昇が国民生活を圧迫
第6位	2022年の出生数が80万人割れ
第7位	対話型生成AIによる社会の変化
第8位	大雨、猛暑など気象災害
第9位	地球温暖化の現状
第10位	国連はウクライナ問題を解決できず
第11位	マイナンバーカードをめぐるトラブルが続出
第12位	日本の防衛問題（反撃能力保有など）
第13位	フィンランドがNATO（ナトー）に加盟
第14位	関東大震災から100年、地震・津波対策
第15位	2024年7月に新紙幣を発行予定
第16位	新型コロナウイルス感染症の扱いを「5類に」
第17位	外国人観光客数が回復
第18位	こども家庭庁が発足
第19位	物流2024年問題
第20位	再生可能エネルギーの利用推進